
ポケポケ?ランドパーク

ブイゼル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケポケ？ランドパーク

【Nコード】

N9563T

【作者名】

ブイゼル

【あらすじ】

少し昔の話。

森の中心に、ランドパークと呼ばれる、あるポケモンたちの集合場所があった。

そして、ランドパークを中心に活動する「ハッピーズ」。

かつてない、壮絶な物語が始まろうとしていた――……。――。

プロローグ（前書き）

多すぎる連載物。

さらにまた一つ増やそうとしてます。

この物語は、かつて私が幼稚ながら漫画を描いた時のマンガのタイトルです。

でも、主人公は実のところピカチュウですが、せっかくベストウィッシュあるんだし、ミジュマルに置き換えてもいいかなということ、やってみました。

見苦しい文が続くと思いますが、よろしくお願いします…。

プロローグ

どこかにある、小さな村。

そこに暮らす、小さな生き物、ポケモン。

種類は豊富で、色々な色、様々な形をしている。

そしてこの村には、一匹のミジュマルがいた。

彼の名はシエル。

さわやかな日差しを受けながら、彼は今日も森に行く。

森は、至る村のポケモンの集合場所である。

そこに集まるポケモン達。

ポカブのマグマ。

パチリスのチュリ。

リオルのパール。

ツタージャのリーフ。

その他、たくさん仲間が集合する。

森の中心地に、奴らは集まる。

人々はそれをランドパークと呼ぶ。

そして彼らは、あらゆるところに行き、助っ人として活躍する…。

そんなランドパークで巻き起こる、小さな物語…。

第一話 さわやかな一日

「おはようパール!!」

「あ、おはようシエル」

のんびりとあいさつをしたこのポケモンの名は、前回説明した通りシエル。

彼はのんびり屋の♂。

好きなことは水に浮かび、日向ぼっこをすること。

嫌いなものは、悪い人、そして電気。

かつてシエルは感電して死にそうになったことがある。

そして、先ほど挨拶を返したポケモンは、リオルのパール。

彼は少々せっかちな♂。

好きなこと(?)は筋トレで、日々強くなるために練習してるんだとか。

嫌いなものは、シエルと同じで悪い人。

そして、虫。

以前、キャベツの入ったスープを食べようとしたら、虫が大量に出てきて、腰を抜かしたそうだ。

「おーいおーい!!」

「…」

おーいおーいといったのはポカブのマグマ。

彼もまた♂である。

好きなことは、シエルとはちょっと違うが日向ぼっこ。

嫌いなものは悪い人、水。

だけど、シエルのことは尊敬しまくっている。(でもシエルが水鉄砲したらビビる)

そして、無口なのはツタージャのリーフ。

♀である。

好きなことは、みんなの会話を聞くことと爽やかな風。

嫌いなものは悪い人と魚。

あの生臭さが嫌いなんだそうだ。

「あ！！みんなもう来てたの！？」

必死にもうダッシュしてくるのは、パチリスのチュリ。

彼女も♀である。

好きなことは食べることとしっぱを追い回すこと。

嫌いなものは悪い人、そして地震。

みんなはみんな、尊敬しあっている。

これが、ハッピーズの仲間である。

彼らは一体何をするのか？

「ハッピーズ参上！！」

「ぬおおお！」

ただ今、泥棒を追っているところ。

俊足のチュリが、猛ダッシュで泥棒を追う。

「つかまーえたっ!!」

「くっそ・・・覚えてろ」

「逃がさないわよ」

冷酷な目で、リーフが見下ろす。

「ひいーっ!! もうしません、許してください!!」

泥棒は頭を下げる。

「さっすがリーフ♪」

「やるじゃん」

パールもマグマもリーフをほめる。

「:／／／」

照れるリーフ。

彼女、結構恥ずかしがり屋なのだ。

「というわけで、一件落着く!!」

シエルは頭脳系。

作戦をいつも考え、実行する。

そしてハッピーズのリーダーである。

ポカブは嗅覚抜群。

花で犯人のにおいを突き止める。

チェリは先ほどの通り、俊足。

素早い足で、だれよりも早く犯人を捕まえることができる。

パールは格闘。

もしも手におえない相手も、黙らせることができる。

リーフは冷静沈着。

やるときはやる、頼れる仲間。

それが、ハッピーズ。

幸せをみんなに届けるために、奴らは今日も働く…。

第二話 動乱

「シエル！！大変だよ、起きろよ！」

朝から、パールはシエルの家の前でシエルを呼んでいた。

「…何？人（？）がせっかく気持ちよく寝てたっつーのに…」

「それが…！！あっちのとなり山が火事になってる…！！」

「！？」

そこへ、チュリがきた。

「どうかした？」

「いや、それがさ…」

事情をチュリに話す。

「ええー！？じゃあ、リーフとマグマも呼んで行った方が…」

「リーフはダメでしょ」

「…え」

「草タイプが山火事になってる森の中に行っても…弱る一方だよ…」

「そっか。じゃあ、マグマだけ呼んでくる！」

「リーフに会ったら、ごめんって言っというて…！！」

「うん！」

チュリは、自慢の俊足でマグマを呼びに行った。

マグマも来て、依頼に行った後、一人残されてしまったリーフ。

「山火事の方に行ったのね…」

だけど、リーフだってわがままじゃないので、行かずに帰ってくるまで待つことにした。

かえって足を引っ張ったらどうする！

リーフだってばかじゃない。

しかし、リーフに魔の手が迫る…。

「ただいま…っつかごめんねリーフ、でも消火活動終わったよ！」

しかし、ランドパークには誰もいない。
がらんとしていた。

「…リーフんち行こうか」

「もしかしたらすねてんのかも」

一同はリーフの家に向かった。

しかし、家にもリーフはおらず…。

「どこ行っただのかなあ…」

「探そっか」

「おう」

町や森を駆け巡り、リーフを必死に探すも、だれに聞いても、どこに行っても見つからなかった。

「…リーフ…」

ほかの町へ行ったりもしたものの、やはりどこにもいなかった。

「これだけ探しても見つからないなんて…」

「どこ行っただろう」

みんなの頭の中は不安でいっぱいだった。

リーフは…。

「ちょ…放しなさいよ!!」

「まーまーいいじゃないのお嬢ちゃん…こっちにおいでよぉ」
「いやだったら!!」

一方リーフは、ヤンキー的な奴らに捕まえられてしまっていた。

「私を使って何をしたいの!？」

リーフは確かにかわいい。

連れて行かれても仕方がないといえる。

そして今は、部屋の端っこに追い詰められていた。

ツルのムチで反抗しようとしたが、その前にツルに麻酔を打たれ、
ツルは動かない。

そのせいで、力も入らないのだ。

今使えるのは口だけ。

ソーラービームはあいにくながら覚えていなかった。

「く…」

いつもなら楽勝勝ちの相手に勝てなくなってしまったことにショックを覚えてしまった。

悔しい。

「もういい…ついてきてもらうからな!!」

「むぐ!？」

口を布か何かで押さえつけられ、リーフはどこかへ連れ去られてしま…。

さて、このヤンキー的な奴らの正体、そしてリーフを連れ去る真相とは一体!？

そして、シエルたちは間に合うのか!?

第三話 リーフを奪還せよ!!

「…あれ？」

リーフが失踪してしまい、探すシエルたち。

マグマが、何か手がかりを見つけたみたいだ。

「リーフのにおいがする!!」

リーフのにおいを感じたらしいマグマが、歩き始めた。

「つ…ついて行ってみるか」

「うん」

みんなは、マグマの後ろにつき、マグマについて行った。

「…!!」

リーフは、何もできなかった。

ただ、奴らが言うことを聞いていた。

「伝説の勇者の娘かあ…こりゃあ面白くなってきたぜ!!」

「身代金、がっぽりいただけますねえ、親分!!」

実は、リーフの父であるグリーン（ジャローダ）は、かつてこの町を救ったヒーローである。

グリーンは、もうこの世にはいなくなってしまったものの、その娘

であるジャローダにすべてを託し、この世を去ったといわれる。

（お父様…なんか…私…悪用されそうです…）

リーフは頭の中でつぶやく。

「さあて、王子様は来てくれるのかねえ？」

ヤンキーのうちの一人がリーフにずいっと近づき言った。

きっとシエルは…助けてくれる…！！

そう思った時…！！

「ここだぁーっ…！！」

シエルが、姿を現した。

「…！！」

（シエル…！！）

「お前ら…この子を…放せ…！！」

シエルとポールがヤンキーどもに突っ込んでいく。

「らあっ…！！」

「とりやつ…！！」

チュリもスパークを、マグマもひのこを繰り出し、相手を翻弄する。

シエルは、ある程度敵を倒した後、リーフの口をふさいでいる布を取った。

「ごめんなリーフ…遅くなって」

シエルは、謝った。

「シエル…」

リーフは、呼吸を荒らげながら、シエルに抱き付いた。

「…怖かった…！！」

シエルはちよつとびっくりしていた。

だって…いい歳の女の子に抱き付かれたから。

「…／／／」

シエルは照れていた。

「シエル、いいから戦え…！！」

ポールがKYに声をかける。

「あ、ああ…」

シエルはリーフを後ろに、戦い始めた！
相手を次々となぎ倒していき、しまいにはすべてをなぎ倒した…に
見えた。

最後に一匹、残っていた。

「…ハッピーズ…お前ら…覚えてろ！」

その一匹は、どこかに消えてしまった。

「リーフ！！」

「無事か！？」

「うん…」

リーフも、

「ごめん」

といった。

「私が、弱いから…」

「ツルのムチ・・・使えなかったんだろ？仕方ねえじゃん」

「それがリーフの持ちわざだし！！」

「…私、もつともつと強くなる！」

「そうだそうだ！！特訓なら付き合うぜ！？」

シェルもリーフも、みんなのキズナが強まった一日だった。

第四話 リーフの悩みとシェルの弱点

「おはよ…あれ？リーフは？？」

「リーフ？きてねえぞ」

「…ちよつと…見てくる」

シェルは朝早く、リーフがいないことに気付いた。

森の先には小さな谷がある。

リーフがいないとなればきつとそこにいる。

シェルは朝早々、走っていった。

「リーフ？」

一瞬びくつと肩を震わせたリーフ。

「ああなんだシェルか…」

「どうしたの？こんなところにいるたら危ないでしょ」

「シェル：私の悩み、聞いてくれる？」

「いいけど…」

リーフはふーっとため息をつく。

「この間、私が捕まった時、私なんの反撃もできなかったでしょ？
それもある。でも、お父様が有名だから、その娘である私の名も知
れ渡っちゃってるでしょ？今度はいつ、悪用されるかわからなくて
・ずっと、迷ってたの」

「どんなふうによ？」

「私：この世にいいのかな、ってさ」

「リーフ…」

シェルも実際驚いているようだ。

いつもあんなにつんつんしているリーフだって、悩みぐらいあるこ
とはわかっていた。

でもこの悩みは…重大だ…。

「死にたくないよ？でも…生きる価値が私にはないもの。お父様が
町を救って、その後、なんで死んだのか知っているのは、私しかい
ない。でも、なんか…もう…」

リーフは泣きだした。

「もう私、いなくてもいいんじゃないかってホントに考えちゃうの
！！」

その言葉を聞いた瞬間、シェルは立ち上がった。

「つらいかもしれない。実際、その人の身になってみないとわから
ないかもしれない。でも…僕らには…リーフが必要なんだ！！リー
フは、立派に生きてる！！僕のお父さんもお母さんも、僕を見捨て
たけど！！でも！！生んでくれたことは、感謝してるし！！僕だっ
て、…水の中で、目え開けられないよ！！」

シェルがこんなことを言うなんて。

「うん…ありがとう」

リーフは静かに言った。

「少し…元気が出たわ」

そして、シエルの方に飛びつき、わんわん泣いた。

シエルは、この時、リーフだって女の子だ、と思った。いつもはやや男勝りだけど。

でも、シエルは、ある日のことを思い出していた。

それは、2年前にさかのぼる――

シエルは、生まれてからすぐ、親を失った。

今はどこにいるのかわからないけど、親はシエルをマグマの家の前において行った。

マグマは、ちょうどその一日後に生まれるわけだ。

マグマのお母さんは、シエルを見るなり、親を探そうとした。

しかし、シエルの母、そして父ともに、山の土砂災害に巻き込まれ

たのだ。

やがて、マグマとシエルはすくすくと成長した。

しかし、シエルの両親はシエルにいろいろと教えることができなかった。シエルは水中で目をつぶれなくなった。

マグマがひのこの練習をしていると、シエルは火の粉が出せず、しばらくいろいろとしていたら、水鉄砲が出て、マグマが風邪を引いたことがあった。

でも、シエルはちゃんと自分のせいだと認識し、木の実を取ってきたりした。

そして、チュリやパールとも出会った。

数年後になれば、もうシエルは立派なミジュマルになっていた。

リーフが引越してきて、ますますにぎやかになった。

そしてハッピーズを結成。

しかし、シエルを襲った出来事は、数年、彼を苦しめることとなる…。

シエルが親を失ったことも、あの日のことも…。

第五話 シェルの過去編 part 1

シェルは、自分の親が死んだことを知らない。

マグマの母を、ずっと「お母さん」と呼んでいた。だけど、それは時間の問題だった。

「シェル、大事な話があるの」

マグマの母：ジュールはいった。

「なあに？お母さん」

マグマとシェルが十二歳のころ。

義母のジュールに呼び出され、居間へ来たシェル。

「あなた…思わない？」

「なにを？」

「私やマグマと…あなたの体系や色が違うこと」

「色違いじゃないの…？」

「これまでではそういつてきたけど、もうあなたは子供じゃないから、今のうちに話しておこうと思って…」

「…？」

シェルは、ジュールの様子がおかしいことに気付いた。

言いたくなさそうな表情。

「…あなたのお母さん…とお父さん…はね、十二年前、つまりあなたの卵を産んで、山火事に会って…死んだの」

「し…死んだ…！？」

「受け入れられないことは承知で今しゃべってる…」

「死んだ…って、冗談でしょ？」

マグマは、静かにその話を聞いていた。

シェルの過去…。

これまで、ともに育ってきた身だ。

シェルの過去ぐらい知っておいてもいいだろう。

「シェル…私、あなたのお母さんと友達だったの」

「うん」

「あなたの両親は、救助活動をする仕事をしていたわ」

「…うん」

「あの日、山火事が起こった時、きっと『シエルを頼む』って感じで私の家の前に卵を置いて行っただけみたいで…」

「…山火事で…水タイプが死んだ？ふざけてるよそんなの…」

「シエル…」

「ふざけてるよそんなの！！僕の親は…僕のことなんてどうでもいいから、そんな役職に…」

「シエル！」

「お母さんも…もっと早く話してくればよかったのに！！」

シエルはそういうとジュールに背を向け、走り出した。

家を飛び出し、どこかへとひたすら――。

「ふざけてるって…ふざけんな…」
ぶつぶつと走るシェル。

親はもうこの世にいないというショックと、隠し事があったという事実。

どうせ僕のことなんてどうでもいいから、救助活動をする仕事なんかについたんだ。

僕のこととはそっちのけで。

卵を温める暇もないぐらいに忙しい仕事を…。

僕は、ハッピーズを設立した意味が…。

まったく、あほに思えてきた。

「もう、なんで…僕をこの世に残してさ…立派な罪だ…」
空を見上げ、つぶやいた。

ハッピーズなんて、幸せを作るとかいうわけで作ったけど、今の僕はとても幸せなんかじゃない。

ああ…

ホントに僕って、生きてる意味あんのかなあ…。

草むらからポケモンが現れて、それが大きな出会いを果たすのは、
もう少し後の話である…。

第六話 シェルの過去編 part 2

「なんなんだよ…」

シェルはぶつぶつぶやきながら歩き続けた。
家からできるだけ遠くに行こうと。

「親が山火事で死んだからって…何も義理の母親になってまで僕を
育てる意味あんのかよ…」

僕はこの世に不必要なポケモンだ。
いたって何の意味もない。

そのとき、ふいに草むらがガサガサと動いた。
「!？」

振り返ると、そこにはポケモンがいた。

しかし、どこで見たわけでもなく、知らないポケモンだった。

「…なんだよ」

シェルが冷たく言い放つ。

「…そんな言わなくてもいいじゃん、ばーか」
そのポケモンは言った。

「ちよ…初対面に向かって…」

「そっちが冷たい態度とるからでしょ？」
そういうと一呼吸おいて、

「僕はマッスグマのスグル。君は？」

「なんで初対面に自己紹介なんか…」

「いいからしてよお…」

さびしそうに言うスグル。

「はいはい…僕はミジュマルのシェル。…これでいいの？」

「うん。よろしくシェル♪そういえばシェルってここらでは見かけ
ないけど…どした？」

「じ…実はさ」

シェルはスグルに事情を話した。

「へえ…でも、わかるよその気持ち」

「え？」

シエルは驚き、スグルを見た。

「僕は…親に捨てられた、天涯孤独のマッスグマだから…」

「…うそでしょ」

「ほんとさ。その事実、この間知ったんだ」

「そう…だったのか…」

シエルは、まさかこんなところで同じ境遇のポケモンに会うとは思わなかった。

「お前もか…でも、お前の方が十分かわいそうだ」

「いや…シエルだって…火事で親を亡くすなんてもってのほかだよ」

「僕たち…友達になろう」

「もうなってるよ」

そういうと、シエルはあの時以来に笑顔を見せた。

もう、大好きだった親はいない。
本当の親はいない。
でも、こうして友達ができた。
それだけで、シエルはうれしかった。

そのころ、ランドパークでは…。

「シエルが家出!？」

「うん：飛び出してく所を見ちゃったんだ。」

「そんなあ：じゃあハッピーズはどうなるんだよ!？」

「：だから、探そうよ」

「おう!!」

家出したシエルを探すべく、ハッピーズは立ち上がった…。

シエルに起こる災難。
でも、これだけでは済まなかった…。

第七話 シェルの過去編 part 3

シェルは、スグルと二人、野原に寝そべっていた。

「ねえスグル」

「なに？」

「僕たちって…一生、天涯孤独なのかな…」

「かもね」

「生き返るとか、そんな奇跡ないよね…」

「ないでしょ…肉親が生き返るとか怖いって」

スグルが笑う。

「もう、事実を知ってしまったからには、家になんか帰れないよ…」

「その気持ちはわかるよ…でも俺は…」

スグルが間をおいてからしゃべった。

「母ちゃんのこと、ホントの母ちゃんだと思ってるよ、義理の母でも」

「…え？」

「だって、これまで…12年間、育ててくれたじゃないか？なのに家出なんてできるかよ」

スグルの発言に、シェルは驚き、

「お前家出してきたんだろ？」

「うん、ちよっともめっちゃって…でも、母ちゃんは母ちゃんだ」
スグルって前向きだな…。

僕みたいに陰気にずっと親を責める様な奴じゃないし…。

でも、真実を受け入れるのって相当大変だよな…。

もうすでに受け入れられなくて、がけっぷちにいる僕は、スグルみたいに前向きにはなれない。

シェルは、もはやスグルの前向きさにあきれかけていた。

でも、同時にあこがれもしていた。

そんなにすぐに前向きになれる、立ち直りの速さに。

「スグル：どうやったら、スグルみたいに前向きになれるかな」

「え？俺前向きじゃないよ？」

「ううん・・・十分前向きだよ」

「そっかなあ：」

前向きさに気付いていない：。

でも、色々な事を打ち明けたことで、すっきりしてきた。
そして、前向きになれるようになってきた。

ガサツ：。

「？」

スグル、シエルともに、くさむらが動いた音を聞いた。

「何かいる…？」

「…ワレハココニアリ」

そこから現れたのは…ミュウツー！？

「な…幻の…！？」

「オマエヲ…コロス」

「は！？まだ12歳の僕たちを殺す…！？」

「ソンチヨウサマノメイレイダ」

「そんな簡単に殺されてたまるかよ…！」

しかし、スグルの足はがたがたとふるえていた。

「ど…どうしたのスグル…！」

「そ…村ちょ…」

「村長が？」

「お…俺の父ちゃん…」

「え！？」

「父ちゃんに、身を追われてる…」

「なんでだよ！？」

「…僕は…父ちゃんを裏切った…家を飛び出して…」

「な、何言って…」

「…シエル、逃げて…」

「なに言ってるんだ、逃げるわけねえだろ！？友達が…こんな状況だつていうのに逃げるって！？ふざけんなよ…」

「シエルを巻き込んだんじゃいけない…」

「僕は逃げない…！！スグルと戦う…！！」

「シエル…」

二人とミュウツーの戦いが始まる…。

そして、その先にある結末とは！？

第七話 シェルの過去編 part 3 (後書き)

分かりにくかったですか？

スグルのお父さんは、スグルの住む村の村長だけど、スグルが家を飛び出し行方不明になり、そのまま行方をくらし、後継ぎのくせにと逆ギレして、見つけ次第殺せというわけです。

ひどい親を持ったもんだスグル。

そしてシェルはスグルの窮地を救えるのか？

次話もお楽しみに♪

第八話 シェルの過去編 part 4

「スグル…僕は君をおいてったりしないからね…」

「シェル…逃げてよ、これは俺の問題だって言ってるでしょ？」

「僕は…逃げないって決めたんだ。スグルは守る…！」

「…ハカイコウセン、ハッシャ」

「…！」

ミュウツーは、いきなり破壊光線をぶちかましてきた！

「い…いきなり!?」

「電光石火…！」

スグルがミュウツーに突っ込んでいく。

「…ムダダ」

しかし、ミュウツーはこれをあっさりとかわしてしまう。

「…!?」

勢い余ったスグルは、真正面の木にぶつかってしまう…。

「スグル！」

「イカセルカ…サイコネシス」

サイコネシスによって、シェルの身は宙に浮かび、そして軽くだがふっとばされてしまう。

「…強い…!!」

「ソーラービーム…！」

スグルは、太陽の光をため、ミュウツーに発射した。

「バーカ」

しかし、ミュウツーはサイコネシスでソーラービームをコントロールし、シェルとスグルの方へ…。

「うわ…っ…！」

スグルにはあまり効かないが、シェルには効果抜群で、ダメージが重なる。

「いってー…」

しかし、躊躇無しに攻撃を続けるミュウツーにかつすべは、もはやなかった。

「ギガインパクト」

そして、ギガインパクトをスグルに向けて放ち、スグルは遠くにぶっ飛ばされてしまう…。

「す…スグ…」

しかし、シエルに戦える力はもうなかった。

その時…！

「ツルのムチ…！！」

「放電…！！」

「ニトロチャージ…！！」

「とびげり…！！」

シエルを見つけて現れたのは…。

そう、ハッピーズだった。

「シエル、大丈夫！？」

「…み…みんな…」

しかし、シエルは力尽き、倒れてしまう。

「よし、行くぞ…！！」

「おう…！！」

そうしてみんなは健闘し、ミュウツーを倒した。

しかし、シエルの意識は戻らなかった…。

「…ここは…」

シエルが目を覚ましたのは、その4日後。

「よかった…」

「マグマ…」

どうやら、シエルが寝ていた部屋は家のようだ。

奥から、ジュールが出てきた。

「シエル…ごめんね」

「母ちゃん…」

「私…あんなに唐突にシエルに話してよかったのかって、ずっと思
ってて…ごめん。シエル!!」

ジュールは、ぽろっと涙を流す。

「ねえ…母ちゃん…母ちゃんにとって…僕は…」

「息子!!」

シエルの目には涙が浮かぶ。

「お腹を痛めてはいないけど、友達の子供よ!! いなくなっている
ものじゃないの!!」

「母ちゃん…母ちゃんは母ちゃんだよな!!」

シエルは涙が浮かんだまま笑顔を見せた。

しかし…。

「そう言えば…スグルは!？」

第九話 シェルの過去編 part 5

シェルは、再びあの森へと出向いた。

「スグルーっ!!どこにいるんだよーっ!?!」

シェルは一人、マツスグマのスグルを探していた。

なぜなら、先ほどたたかったミュウツーによってぶっ飛ばされてしまったからだ。

その後、何の報告もなく、いなくなってしまったのだ。

「スグル…どこにいるの!?!出てきてよスグル…」

しかし、一向に気配もない。

しかも、そこらには骨、骨、骨。

シェルはぞっとした。

もしかしたら…スグルは…死んだのか?

いや…そんなはずはない…うそだろ…

しかし、何度呼んでも、スグルは出て来てくれず…

シェルは、がけに座り込んだ。

「スグル…」

そうつぶやいた。

スグルがいない。

スグルは自分のせいだからシェルは巻き込みたくないって言ったけど…まさか!?!

シェルは自分が考えたことをばかばかしく思った。

でも、まさか、自分から村長である父のもとに向かったとか、そういうのはないよな!?!

行くってことは…殺されるってことで…

「スグル…スグル…!!」

シェルは一人、がけに腰かけながら、頬に温かい液体が流れるのを感じた。

それは、目から、ぼろぼろと、滴るように流れた。

「スグルーっ！！」

「シエル！！どこ行ってたの？」

戻ってきたシエルに声をかけたチュリ。
しかし、シエルの顔は暗かった。

「ど…どうかしたの…？」

「スグル…」

「え？」

「スグルが…死んだ」

「死んだ…って…シエルが家出した後、知り合った人とか？」

シエルはただ黙ってうなずいた。

「僕…スグルを…守れなかった…友達だったのに…」

「…シエル…」

そこへ、リーフが来た。

「…シエル、何があったか知らないけどさ…大体わかるよ、その顔見てれば」

「リーフ…」

「でも、仲間がいるでしょ！？ハッピーズのみんながいる！！シエルは一人じゃない…」

リーフが珍しくそんなことを言った。

「そうだよ！！お前に何があったかなんて、家を飛び出していったお前にしかわかんねえだろ！？」

「仲間がいる！！僕らに打ち明けて、何があったのか！！」

マグマは、シエルにそう言った。

「みんなあ…」

きっとそれは、シエルがみんなに見せた、初めての泣きっ面だった…。

「…スグルってやつが…そんなことに…」

「僕だって受け入れられなかった。僕と同じ境遇のポケモンに会うとは思ってなかった。だからこそわかりあえた。それなのに、僕は…僕は…スグルを、守れなかったことが悔しくて…!!」

「事情は分かったよ。でもさ…僕たちがいること、忘れないでよ？僕たち、どんだけシエルのこと探したと思ってるの？」

「みんな…ごめん、迷惑かけて」

「でも、シエルが必死だったことは、その傷を見ればわかるよ」

「でも、友達を守れなかったんだ!! 友達なのに…」

「シエル…もう、そのこと…忘れなよ」

「無理!!」

「でも、いつまでもお前を痛めつけるんだぜ？そういうのが…それにさ…スグルってやつも、それを望んでいない」

「!？」

「だって、お前がずっとこのことを引きずって、暗いままのシエルだったら…スグルだってそれを望んじやいない」

「…そうなのかも」

「シエル、乗り越えよう!! こういうの」

「うん…うん!!」

そして時は現在に遡る。

第九話 シェルの過去編くpart5 (後書き)

これでシェルの過去編終了です。

第十話 再会

「…あんなことがあったなあ…」

シエルは、かつての友、スグルについて思い出していた。

「…スグル…」

目をこしつとこすり、

「いや…もうめげちゃいけないよね!!」

そういうと、ほっぺをパンパンとして、家を出た。

「もうみんな来てる!？」

「シエルったらおっせーなあまったく」

「…もう」

「イエーイ、シエルに勝った！」

「そんなことで喜ばなくても…。」

ランドパークには、すでにみんなが揃っていた。

「ごめんごめん、考え事してたら遅れちゃった」

シエルはそういつて頭を掻く。

「まあいいか、依頼行くぜ！！」

「うん！！！」

そういうと、まっすぐ依頼先である小さな村へ向かった。

そこは、かつてのスグルの故郷だった…。

「ここが…って…なんか町変わってる！？」

そう。

町は廃墟と化し、木が枯れ、家も悲惨なまでに悲しい状態。
砂嵐が吹き荒れ、まるでどこにも誰もいないように見える。

「なにがあつたんだ…!?!」

「三年前は…もちょっと木が茂ってたぜ…?」

「それに、町も綺麗だったし…」

この町は…村は、死んでしまっていた。

「じゃあ何でここから依頼が…?」

その時、後ろをつつかれた。

振り返った…。

シエルは、いきなり後ろに3メートルほどぶっ飛んだ。

「……!?!?!?!?!」

ものすごくびっくりしている…。

でもそれは当然である。

なぜなら…。

死んだはずのスグルがいるからだ。

「す…すすす…スグル!?!」

「シエル?」

スグルは相変わらず平然とした態度でシエルに接する。

「あ、あの後さ…お前がミュウツーにぶっ飛ばされた後、どうなったの…?」

「俺?俺は…遠くにぶっ飛ばされて、目が覚めたら海辺にいて…」

「生きてたの…?」

「ああ…ごめんなシエル」

シエルは、スグルが何か言いかける前に、スグルの胸元に飛び込んだ。

「心配掛けやがって…このっ!!…うわぁ…ん…」

シエルは、もう何が何だか分からなくなってしまい、泣き出してしまった。

「シエル…ごめん…!!」

「こんなに…かっこよくなっちゃって…こんなに…心配かけてえっ…」

二人して、しばらく泣きながら抱き合っていた。

「お、あなたたちはシエルの仲間で？」

「はぁ：そっすけど」

「なんかもうほんと：迷惑かけてすんませんでした：」

「いやいや、別に大丈夫だけど？」

「乗り越えたのはシエルだから」

シエルはまだスグルから離れていなかった。

「ああもうほんともう心配させやがってクソー！！」

「だーからもうほんとごめんて」

「：でも、よかった」

「シエルが生きてるのか不安になったぜ俺は」

「こっちだってスグルが死んだかと思ったじゃん」

「あっはっは：」

で、スグルが真剣な顔になった。

「なあ、シエル：俺を、仲間にしてくれないか？ハッピーズの」
「え！？」

「呼んだのはそのためだ：でも、まずは町を復興させないと」

「そうだね：スグル、仲間になって！！」

「俺たちも大歓迎だよ！！」

「うん！！」

「…いいの！？」

スグルの顔が輝いた。

「いいよ！！スグル！！」

シエルも満面の笑みを浮かべた。

そして、シエルは水をやり、スグルは土を掘り返し、そこにリーフが種を植え、マグマが日照りで晴らし、パチリスが電気を使って肥料を作り、そしてパールがそれを砕いた。

すると、街はたかだか数十分で潤いを取り戻した。

「最近の異常気象で、街がやられてたからな：ありがとう！」

そして、スグルもハッピーズに加わったのであった。

第十話 再会（後書き）

スグルは結局生きてました W

第十一話 森の奥深くで芽生える、新たな物語

「スグルー、おはよう!!」

さて。

今、スグルはどうしているのかといえば。

家が小さなあの村にあるので、毎朝来る…というのはあまりにも大変なので…。

シエル、マグマとともに暮らすこととなった。

ジュールは温かく受け入れてくれた。

「ああ、おはようシエル!!」

「マグマは？」

「もういったぜ」

「やっぱー…行かないと!!」

朝からとれたてのトマトをほおばって、歯を磨き、出発した。

「ヤッホーシエル！」

チェリが大きな声で呼ぶ。

「おはようチェリ!!」

シエルも負けじと大きな声で返答する。

「遅いよシエル」

「ごめんごめん」

来て早々、マグマにちよつと怒られてしまった。

「あれ？パールは??」

「来てないわよ」

リーフが静かに言う。

「パールが来ないなんて珍しいなあ」

「たぶん森の中よ」

リーフがそう言った。

「そうかもね」

というわけで、いるメンバーだけで依頼へと向かうことにした。

「ふああ・・・ねむいでしゅ」

森の中。

一匹の小さな、花束のようなポケモンが、森の中をうろついていた。

「ここはどこでしゅかねえ…」

きよろきよろとあたり近辺を見渡す。

「…ミー、迷子でしゅ？」

そこへ、リオル・・・パールが。

「…？あれは…」

そーっとパールが近づいた。

そのポケモンはすぐに気づいて、ぴよこぴよこと動き出した。

「だ…誰でしゅか!？」

「誰…って…言われても…」

パール自身も相当動揺しているようだ。

「そう言うお前はなんなんだよ!」

「ミーでしゅか？ミーはシェイミのミーでしゅ」

「ミー…ってそのままか」

「ミーは道に迷ったんでしゅ」

「道に迷ったって…」

「だから、案内してほしいんでしゅ」

「どこに!？」

「森の神殿でしゅ」

「森の神殿？」

「知らないんでしゅか!？」

「知らねーよそんなの」

「でも、あるんでしゅ、この森のはずでしゅ」

「…はあ」

ミーはパールの頭に乗った。

「なにすんだよ!？」

「いいから森の神殿に連れて行くでしゅ!!」

「わかったけど…どこらへんだ!？それ」

パールは、少々めんどくさいのと行動せざるを得なくなってしまうようだ。

そのころ、森の奥深く。

「…」

一匹のポケモンが、技を放った。

「…この森を、焼き尽くすとするか…十七年前のように」
それは、次第に広がっていく。

「…闇でな」

どうやら、闇で森を焼き尽くしたことがあるようだ。

黒いものが、どんどん広がっていく。

やがて、一本の木が黒いのに飲み込まれ、消えてしまった。

そして、二本、三本…。

一本ずつ、木が消えてゆく。

そしてそれは、森に起こり始めた変化の一つであった。

ドカーン……。

「!?!?なんだ!?!」

森の中にいたミーとパール、そしてシエルたちハッピーズたちにも、この異変はせまろうとしていた…。

第十一話 森の奥深くで芽生える、新たな物語（後書き）

空白が多いですけど完成です。

第十二話 森の異変を救え!! (前書き)

今回から書き方を統一でこんな感じですよ←

第十二話 森の異変を救え!!

「爆発音がしたぞ!?!」

「森の奥だ!?!」

シエルとスグルとマグマとチュリとリーフは、森へ向かおうとした。

「待って」

しかし、行こうとしたリーフが足を止める。

「森の燃え方がおかしい!?!」

「:!!!」

黒い炎が、森をどんどん消していく。

「ランドパークを救わなきゃ!?!」

「僕たちの活動場所:!!!」

シエルを先頭に、まっすぐ森へ。

しかし、そんなシエルに一発黒い球が!!

「!?!」

「危ないっ!?!」

リーフの足、いや身体が、シエルの前に。

「リー…」

しかし、リーフは倒れこんでしまった。

「…！！」

でも、どうやら悪夢を見ているようで、うなされている。

「どうすれば、リーフを…」

考えている間に、シエルについに黒い球がヒット！！

「…助け…ら…」

シエルは気絶した。

「ジュール・・・この子をお願いね・・・」

「ええ、わかってるわ」

あれは…母さん？

母さんと…ダイケンキ…。

あ、もしかしてあれが本物のかあさん？

「じゃあ行ってくるわ」

そこへ、もう一匹ダイケンキ。

「ああいたいた、ブルー、早くしろ」

「今行くわ」

もしかして、両親？

「行くか」

「ええ」

森の中へと行こうとした母、ブルー。

「ねえソード…生きてられるかしら」

「生きられるさ」

父はソード。

「必ず生きて帰ってきましょう、子供のために」

…その前に死ぬんだろ。

子供を置き去りに…

「…！！危ないブルー！！」

さっき、リーフがシェルをかばってくれたように、ソードがブルーを守る。

ソードはその場に倒れこんだ。

「…ソ…」

しかし、ブルーにも黒い球が飛んできた。

「…ド…」

ここまでならわかる、母に大体聞いていたから。

しかし…。

その二匹の近くに、影のようなものが現れた。

頭がソフトクリームのようになっている。

でも体は黒い。

「…!?!」

そのポケモンは、二匹に手をかざした。

そして、二匹を連れてい…った!?!?

「どうということだ…!?!」

話と違う!!

じゃあ、本当のかあさんと父さんは…生きている!!

「どうということだあーっ!!」

がばっと目を覚ました。

「起きた?」

スグルが声をかける。

「ああ、起きた」

シエルがそう言った。

「リーフは…？」

「それが…なかなか目を覚まさねえんだ」

「え！？」

僕のせいだ…！！

「で、どうかしたのか？ すごくうめいてたけど」

「実はさ…」

スグルに話した。

「マジ！？ 生きてんの！？」

「みたいで…」

「…それは…なんか、いまさらっていうかな…」

「だよね」

リーフのことが気になる…。

僕のせいだ…。

まるで父さんみたい…。

…ごめん、
リーフ！

第十三話 リーフVSダークライ

「…あれ？ここは…」

リーフは目を覚ました。

「…変な夢見たな…」

リーフは、シエルと同じで悪夢「現実？」を見ていたのである。

「あ、リーフ！！起きてたの？」

チュリが部屋に入ってきた。

「私は平気よ。…シエルは？」

「あなたがシエルを守ったのは良かったけど、でもそのあと結局攻撃を受けて寝ちゃったけどどうだろうさっき起きたところよ」

「よかった…」

リーフがほっとしていった。

「…リーフ、もしかしてシエルのこと好きなの？」

チュリはそんなリーフの様子を見て、すかさず質問をする。

「な…！？」

リーフは顔を赤らめる。

「な…何言ってるのよ…」

「やっぱりそっか」

リーフはいまだに顔が真っ赤っかだ。

「じゃあ、今からシエルんところ行く？」

「いいよそんなの！！こっちが恥ずかしい！！」

「あんたが恥ずかしいんでしょ！！」

「……。」

「まあいいわ。今からちよつと買い物に…」

言い終わるが先か部屋を出るのが先か、チュリは部屋を出て行った。

それと同時に、何やら黒いポケモン・・・グラエナが入ってきた！！

「…！！誰？」

「ボス、いました」

静かにそう告げた。

「そうか…」

リーフの目の前に現れたのは、なんとダークライ!!

「…ああいう子好みだな」

グラエナがぼそりとつぶやいた。

「黙ってろ…私はいつの心を奪いに来たのだ」

「心を奪う!？」

リーフ自身も驚いた。

心を奪うっていうのは恋のアプローチの際に使う言葉じゃ…。

「まっぴらごめんよ!! 何で私があんたなんか…」

「静かにしろ小娘」

そういうとリーフの前に手をかざし、何か唱えた。

「…!？」

すると、リーフの体はどんどん透明になり、しまいには消えてしまった!!

「…完了、あとはこいつを…」

「戻ってきたよー!!」

チュリが戻ってきた病室に、リーフの姿はなかった。

「リーフ？」

窓も開いてないし、別に異常はない。

しかし、リーフがいなくなってしまうている!!

「こ…これは…!!」

チュリはすぐさま、シエルがいる部屋に向かった。

「シェル!! 大変よ!!」

「…どうかした？」

「リーフがない!!」

「なんだって…!？」

シエルはまだ痛む体を起こし、リーフを探しに行った。

「…なんなんだこの森の状況は…」

そのころ、パールとミーは歩いていた。

森の中に起こった異常。

何があったのか…。

森に…。

どんどん黒くなる森を見ていることしかできなかった。

恐怖にのまれて、技が出せなかった…。

第十四話 ダークライの目的

「けふ…っ…」

リーフが目を覚ましたのは、真っ黒になった森の中。

「目を覚ましたか、小娘…いや、英雄の娘」

「っるさいわね…」

少々キレ気味の口調で言うリーフ。

はつきり言って、あまり英雄の娘といわれるのが好きではないのだ。

しかし、何よりつらいことは、またシエルに迷惑をかけてしまうことだ。

この間誘拐された時も、真っ先に助けに来てくれたのはシエルだった。

なのに、またシエルに迷惑を…。

本当に生きている意味があるのかわからなくなる…。

しかし、今回はなぜか檻の中だった。

「なんで檻なの？」

「この森が消えていく姿を眺めたい」

「なんのために消しているの！？みんなの森を！！」

「…ほう、鋭いな小娘」

「いいから話さない！！」

「俺はこの森に恨みがある」

「恨み？」

「仲間を奪われたのさ、この森でな…十八年前に」

十八年前…。

お父さんが死んだ年。

…まさか！？

「そうさ…お前の父、グリーンと仲が良かったのよ俺は」

「嘘よ…そんなの…！！」

「ほんとなんだなあこれがさあ。その次年、罪滅ぼしじゃないけど森を焼いた」

シエルのお父さんとお母さんが死んだ年…だったはず。

「お前には教えといてやる…お前の友達の両親はしんじゃいねえ…俺の手下さ」

「!？」

その刹那、二匹のダイケンキが来た。

「…あなたたちが、シエルの…」

といいかけた途端、リーフは固まった。

目は生気を失っている。

だいぶやつれているようだ。

「シエル…」

「どこにあるんでしゅか!？」

「わかんないって!!」

一方パールとミーは森の中をずかずか歩いていた。

「…あ!!」

パールとミーが見つけたものは!？

「待っててリーフ!!今いくから…!!」

シエルは、猛ダッシュでリーフのもとへ向かっていた。

第十五話 両親との悲しい再会、そして…

「なんでこんなことに…」

リーフは檻の中に閉じ込められていた。

そしてたった今、ダークライがこの森を燃やした目的を知ってしまった。

自分の父とダークライの仲が良く、死んだ父の腹いせに森を燃やしてシエルの両親を奪った…。

しかも、シエルの両親は生きていて、今、目の前にいる。

リーフは、今、自分がどんな立場にいるのかわからなくなってしまった。

私の父が、シエルの両親の良心を奪ってしまったのなら…。

自分がその罪を償わなければいけない…。

でも、ダークライは…。

頭の中で巡る文字や考え。

どうすればいいのかなあ…。

「…フー!!」

誰かの声が聞こえた。

「フー！！」

声が聞こえる…。

これは、きっと…。

「リーフ！！」

——— シェルだった。

「助けに来たよ…！！？」

シェルは、目の前にいたダイケンキに驚いた。

「…だ…誰…？」

二匹のダイケンキはシェルをにらむ。

「…」

シェルは黙って考えた。

この二匹がだれなのか…。

この間、ダークライが見せた悪夢の中で、両親は生きているという感じがした。

ミジュマルの最終進化系はダイケンキ。

これがもしも僕の両親だったら…？

「わかった…」

シエルはまぶたを閉じ、

「…お父さんとお母さん？」

静かにそういった。

「…」

一方のダイケンキ達は、この小さなミジュマルを見つめた。

「…ねえ、ソード…」

その声を発した雌のダイケンキのいたひと言で、これはシエルの母と父であるとわかった。

「これは、俺たちの子供だ…」

「名前は…どうなったの？」

「シエルだよ」

シエルは自ら名乗った。

「…そうなの…？シエル…！！」

なんと、息子との再会により、ダークライの操っていた力を解いてしまっていた。

「シエル、お前、生きてたんだな…！」

「お父さん…」

「あの檻の中にいるのは、シエルのガールフレンドね？」

「え？」

「助けるわよ!!」

「おう!! 俺たちはラッキーズだ!!」

どうやら、父と母はラッキーズという名前で働いていたらしい。

そして、檻を曲げ、リーフを出した。

「あ…ありがとうござ」「これがシエルの彼女ね…」

ブルーが見つめる。

「彼女じゃない!! 友達だって!!」

「あはは…冗談よ」

今の一言で少しリーフは傷ついた。

だって、はっきりと言ってしまっていたから、友達と。

彼女じゃないと。

彼女じゃないことぐらいわかってるのに、なぜか傷ついてしまった。

…やっぱりシエルは、私の気持ちに気付いていないのね…。

リーフは、心の中で思ったのだった。

第十六話 リーフの思いとスグルの危機

「シエル、ちょっといい…?」

「…いいけど…」

「さっき…私のこと、ただの友達だって言ったよね?」

「うん。あ、正しくは親ゆ…」

「わかってるけど、気づかないの? 私の気持ち」

「ただの…ってところ?」

「そうよ。私は友達じゃないわ。仲間なの」

「うん。そして親友でしょ?」

「…ほんつとに理解力ないわね」

「ごめん…もしリーフを傷つけちゃったんなら謝るよ」

「…まったく」

まあそんなわけでリーフの気持ち在和らいだ。

「お母さんとお父さん!!これからどうするつもりなの?」

「あのダークライを倒すわ!! 私たちがあんな奴に操られてたと思

うと腹立つからね!!」

「…ま、待ってください!!」

「どうしたの? リーフちゃん」

「あの…ダークライは…私の父の友達で…」

「確かに、私はあなたのお父さんを知っているし、仲もよかったわ。でも…」

「あのまま暴れてもらっちゃ困るぜ。しかも腹いせとは幼稚な…」

「リーフ、やろう!! リーフだってあいつに誘拐されたんでしょ! ? だったら…」

リーフは目つきを変えた。

「そうね。やるわ!!」

そこまで言った時、マグマやチュリ、スグルが来た。

「俺たちも協力するぜ!!」

「うん!!」

そして、戦いが始まった。

しかし、時間がたつにつれて、どんどん立場が狭くなってることに気付いた。

闇に浸食されてきているから。

その時…。

ダークライがスグルに近づいた！！

「スグル危ない…」

言いかけた。

しかしもうすでにダークライの手はスグルの背中に…。

すると、スグルの背中にダークライの手が入ってしまった!!

「うぐぐ…!!」

苦しむスグル。

「…スグルが…!!」

立ちすくんでしまった。

仲間があんなふう…。

「お前も仲間になれ」

「い…!？」

その瞬間、スグルは倒れこんだ。

「スグル!! 起きてよ!!」

しかし、倒れたスグルを抱きかかえ、ダークライはどこかへ行こうとした…。

「す…スグルっ!!」

「リーフちゃん!! ツルのムチで捕まえられる!？」

「わかってます」

リーフは全神経を集中させ、ツルのムチでダークライの腕の中でぐったりしているスグルを助けようとした。

しかし、そのツルの先はスグルに届かず…。

ダークライは、

「3日後、ここに来い。決闘を挑む」

といった。

「…分かった」

果たして、シエルはスグルを助けられるのか!?

第十七話 特訓、そして

「…うう…」

スグルの目が覚めた。

「こ…ここは…?」

「目が覚めたか」

「…ダークライ…? ってことは俺は…」

「まあ 囧 というか」

「つーか俺の体に何しやがったんだよ、なんか動かねえぞ! ?」

「それは、私が操れるようになってるのだ」

「え…! ? じゃあ動くのは口だけ! ?」

「いずれ口もわがものになる」

「いやな言い方だな! !」

「でも、あと三日で奴らと戦うことになるんだ、休んどけ」

「奴ら? …まあ、じゃあ休むけど誰と?」

「…奴らだ」

「…? よくわかんないけど協力する気はないぜ」

「でも今お前の体は口を除いて俺のものだ」

「だからいやな言い方するな!! …誰とだろう…」

「特訓するぞ」

「え? 休めつつたそばから!？」

「いいから外に出ろ」

「いや出れないって、体動かねーし」

「お前のその運動神経をうまく使うために特訓する」

「…はあ」

ダークライはスグルの体を使って何をしようとしているのか!？

というよりまずスグルは冷静に考える頭が働いていない!!

奴らという相手がわかっていいのか!？

「…スグルを連れ戻さなきゃ…」

「だから特訓しようぜ、負けたくねーだろ？」

「そうだね父ちゃん」

「やるぜー!!」

そういうわけで特訓開始。

「シエルブレード!!」

「ツルのムチ!!」

「ニトロチャージ!!」

「あ」

シェルが一言。

「そう言えばパールは？」

「ああ、いないね」

「もしかして、今探してるのかな」

「行ってくるよ」

マグマがパールを探しに行った。

「…これは、もしかして森の神殿？」

「みたいでしゅ」

「わかんないのかよ…じゃあ俺はもうそろそろ行くよ、みんなが待ってる」

「あつたでしゅ、森の宝玉!!」

「はいはい…じゃあ俺は行くぜ」

「待つでしゅ!! ミーもみんなに会いたいでしゅ」

「…分かったから、頭に乗るのはやめろよ」

「わかったから、早く行くでしゅ!!」

「…ふぁい」

ようやくパールもみんなと合流することに。

「あ、こんなところにいたのパール!？」

「マグマ!!」

「これが仲間でしゅか？」

「そうだよ。あ、こちらシェイミのミーだ。」

「すげっ、幻のポケモンだ!! あ、僕はマグマ。よろしくね!!」

「で、なんか騒がしいけど?」

「実は…」

マグマは、さっきまであった出来事を話し始めた。

「スグルが…」

「だから特訓してるんだ。早く来いよ!!」

「今から行くよ」

「パール!!どこ行ってたんだよ!!」

「わりい・・・こいつの言うこと聞いてたら時間が」

「スグルが大変なことになってんの、特訓しよう!!」

「おう、今からやるぜ!!」

「ミーも手伝いましゅ」

「マジで!?!いいのかよ」

「いいんでしゅ、手伝ってくれたお礼でしゅ」

「そっか、ありがとう!!」

そんなわけで特訓が始まった。

三日後。

「来たな」

「…スグルを返してもらいに来た!!」

・
・

「…ダークライ…もしかして、奴らって…」

「フフ…面白いことになりそうだ」

するといきなりスグルのまぶたが落ち、宙に浮いた。

「スグル…!?!」

さて、
ダークライは一体どのような戦い方をするのか！？

第十八話 VS スグル、みんなの思い

「助けにきた相手が敵だったらどうする…?」

スグルがしゃべった。

「スグルになにした!？」

「…何をしたかは俺のかってさ。ただ、こいつは俺の操り人形だ」

スグル…を操ってスグルに喋らせているダークライが言った。

「操り人形!？」

スグルはもはやダークライの思うがままとなってしまった。

ついに口まで乗っ取られてしまったのである。

「スグル!! 負けるなよ!! いつもならこんなのちょちょいのちょいだろ!？」

「無駄だ。こいつの良心は心の中だ。この会話を黙って聞いているだけさ」

「スグル…」

「やれ、電光石火」

スグルの体は勝手に動き、電光石火でシエルのもとへ。

「…スグル…起きろ…!!」

シエルはこの痛すぎる攻撃に耐えられるのか…。

スグルの心の中。

「くそっ！体が動かねえ…」

スグルは、自分がこんなに簡単に操り人形にされたことに対して悔しさを覚えていた。

「シエル…ごめん、捕まった俺が悪いんだ…」

勝手に電光石火を繰り出す身体。

中であごめく自分の気持ち。

そして友達が傷ついていく姿…。

ああ、俺は…

もうすぐ、シエルたちが自分に負ける姿を見ないといけないのか…

しかし、操られているスグルにとってもう一つの困難は、体力がじよじよに削られていることだ。

それでもダークライの支配は続くため、自分の体力を超える動きをしなければならぬ。

そして、下手すれば死ぬこともあり得る。

しかも、自分の仲間を傷つけながら。

そんなのはいやだ…。

そして、この攻撃を止めたい。

友達なのに、友達を傷つけるなんて…!!

シエルと出会って、俺は変わった。

なのに、その恩人に…

ごめんなシェル…

でも、こんなのすぐ止めてやるからな…!!

スグルは次第にこの攻撃、そしてダークライの乗っ取りを阻止すべく、心の中で立ち上がった。

「俺を…返せーっ!!」

「中で暴れてるな…」

ダークライがつぶやく。

「黙らせろ」

そしてスグルは、自分に攻撃を受けた。

うぐっ…。

でも、俺は…!!

一方シエルは、痛すぎる攻撃を受けながら、スグルのことを考えていた。

もしかして、スグルを倒せば元に戻るかな？

でもそれじゃあな…。

じゃあ呼びかけをすればいいのかな？

でもだめか。

何か、方法は…。

正直、スグルの運動神経には驚いた。

でも、苦しい。

今、こうして攻撃を受けていることが…。

いやだ…。

スグル、元に戻ってよ…。

「戻れーっ!!」

二匹がそう思った時、スグルの体に異変が…。

第十九話 シェルとスグル、ダブルシュート!!

「…もどれえ…あ」

スグルの願いとシェルの願いが通じたのか、スグルはなぜかただ普通のマッスグマになっていた。

「スグル!!」

「…俺、解放されたのか？ダークライに」

「だと思う、こうしてここにいてことは」

そしてシェルが飛びついた。

「…スグル!! 心配したんだからね!! これ以上心配かけないですよ!!」

「…ごめん…でも、シェル…もう、そこまで体力が持たないと思うんだ…だからその前に…」

「ダークライを倒す、でしょ？」

「その通りだ」

そういうとスグルはにっこり笑い、そして真剣な顔になり、

「やるぞシェル」

「うん!!」

「…解放されたか…でもそんなわけにはいかない。ダークボール」
いきなり黒いボールを放った。

「うわ!!?」

スグルが当たった!!しかし、

「…へへ、無事だぜダークライ」

「!?!」

「三日月の羽」

スグルは、首からぶら下げていたネックレスをダークライに見せつけた。

「チツ…でもそれが利くのは一回だけだ、油断するなよ」

「行くぜシエル」

「オツケー!!」

「必殺ダブルシュート!!」

説明するなら…

ダブルシュートはスグルとシエルの合わせ技で、かつてあの小さい

頃「過去編」の時に考えた技。

でも今回初登場の技だ。

「…くっ…」

さすがにダークライでも効いたようだ。

しかし。

「まあ何もこの俺が倒れることはない」

にやりと笑ったダークライは再びダークボールを放ち、スグルに当たってしまった。

「スグル!!」

「起きるのはいつだろうな…あ、あとそいつにも」

シエルにあてる気はないらしい。

そして後ろの方にいたリーフへ…。

「やめろ!?!」

しかし、リーフを守ったのは…

必死で駆け込み走ってスライディングしたシエルだった。

「でも眠らないよ、三日月の羽があるからね!!」

「シエル…」

「逃げろリーフ、僕はこいつと戦う」

「え？でもそんなわけには…」

「危ないだろ、お前は女の子だから。あ、あとシェイミも一緒に逃げろ」

「ミィ『了解』」

そして残ったのはマグマとパールとシエル。

この三人で勝つことはできるのか…？

「ダークボール」

「しつこいなあ…シエルブレード!!」

「ニトロチャージ!!」

「とびげり!!」

みんなが思い思いの技を出す。

あたったのにもかかわらず、一向に倒れてくれないダークライ。

「なんで倒れないの!?!」

「俺は幻のポケモンだ、そう簡単には倒れまい」

ダークライがあざ笑う。

「悪の波動」

ついにダークライが普通の技を放った。

「気合玉!!」

それに対抗し、パールが気合玉を発動。

そしてそれは大きくぶつかり、衝撃を起こした。

果たして、シェルたちは勝てるのか!?

スグルは…。

「ここは…どこだろう…」

しかし、ダークライが来る。

「なんだよ…もう操るのはやめろ…」

しかし、背中に手を突っ込む。

そして再び間の前が見えなくなる。

「…なんなんだこれはあああああ！！！！！！」

スグルが起きたところは、シェルの家だった。

「…あら、起きたのスグルちゃん」

「あ、シェルのお母さん」

「空き家があったから、そこに住んでるのよ。でも大丈夫？無理はしないのよ」

「シェルたちは？」

「まだ帰ってきてないわよ」

「そうですか…」

じゃあまだ戦ってるのか…。

頼むぜ…シエル！

スグルは、ただ、祈ることしかできないのであった。

第二十話 きみを思う気持ち

「シエルを助けに行かなきゃ…」

「無理しないで!!」

「…チュリ？」

「スグルがシエルと仲いいのはわかるけど、でもまだ傷が癒されていないわ!! 行かない方が…」

「シエルは仲間だ。男の俺がこんなところで寝ててどうする」

「でもスグル…!!」

「大丈夫、もう負ける気は…」

しかし、さっきダークライのダークボールにより見せられた悪夢を思い出した。

「…ないわけではない」

「じゃあ! もっとここで休んで…」

「俺は友達を見捨てたりはしないんだ!! あの時、俺を助けてくれた友達を見捨ててるなんて事…」

「今行ったら逆にシエルたちに迷惑よ!! そんなぼろぼろの身体で来てもらっても…」

「でも…でも…!!」

「スグルはここで大人しくしてればいいの。だからさ、ここから願
つとこうよ!!」

「…うん」

俺は弱い。

仲間に助けてもらってばかりで…。

いつも迷惑ばっか…。

そんなままでいられるかよ!!

チュリがいなくなってから、スグルは外に出た…。

でも、チュリが言った通り、今この状態の俺がシェルのところに行っても、かえって迷惑だ。

そしてスグルは走りだした。

誰も来ない場所で特訓をするため…。

「けはっ…」

「もう終わりか？汚いウジ虫めが」

「やめろっ…」

「仲間もろくに助けられないようなお前らが、俺に勝てるわけねー
だろ」

…僕は弱い…

スグルやリーフの危機を…

守れないなんて…。

何がハッピーズだ…。

人に迷惑かけてるだけなんじゃないのか？

スグル、ごめん…。

友達なのに…。

でも、こんなところで…こんなことで死ぬのは…

何よりつらい…！

スグル、俺は…

もっと、強くなるから…！

そして、シエルたちの戦いも幕が閉ざされようとしていた。

「シェル、立てよ!!」

「マグマ・・・パール…」

「ダークライを倒さなきゃ…ほら、立てよ」

「ハッピーズって、幸せを作るっていうモットーで働いてきた・・・
なのに、僕は弱い…」

「シエル、何弱音吐いてんだよ!! ！まだ先は…」

「仲間を守れないのは…僕が弱いからで…みんなのリーダーには…とても」

「なに言ってるんだ!! ！みんなここまでついてきたのはお前の計画性の良さと性格の良さだぜ!! ！強さなんて関係ない、シエルは俺たちのリーダーだぜ!! ！」

「…そうなのかなあ…?」

「ダメだ!! ！諦めんじやないぞシエル!! ！」

その時。

「シエル、起きろ」

お父さん…ソードが。

「父さん…僕は…」

「リーダーなのに弱音を吐くんじゃねえよ。もっと、プラス思考に行け」

「…僕は、リーダーとして最悪だ」

「お前には、その立派な頭脳を活用できるさ!! ！何ってったって俺とブルーの息子だ、できるはずだ!! ！」

「…そうだね、もっと前に行かないといけないよね」

シエルは立ち上がった。

「リーダーとして僕にできることをすることが…僕の役割だ!!」

「そうだー!!」

みんなのやる気も最高頂。

果たして勝てるのか!?

第二十一話 敗北と行方不明

「…最大の…シエルブレード!!」

シエルはダークライに最大パワー&フルスピードで突っ込んでいく。

ダークライはその攻撃を受けて後ろによろめいたが、

「まだまだ…甘いな」

口でまたシエルを傷つけ、しまいには

「悪の波動」

シエルはぶっ飛ばされ、木にぶつかり、倒れこんだ。

「強い…」

マグマたちも健闘したが、もはや体力の限界により倒れてしまった。

そしてソード…。

ソードも、シエルと同じように突っ込んでいった。

でも大人に対して本気と化すダークライには、もはやかなわなかった。

つまり…。

ハッピーズ、敗退。

「スグルー!!」

「どうしたのチュリ？」

「あ、起きたのリーフ…ねえ、スグル知らない？」

「…知らないけど…」

「いなくなっちゃって…」

「ええ！？それは大変！！探さなきゃ…」

リーフとチュリはスグル探しに。

一方、
スグル。

「ソーラービーム!!」

何度も何度もソーラービームを木に向かって放つ。

しかし、木に当たらない。

「命中しないのはなんでだ…!？」

そしてまたフラッシュバックする悪夢。

「…」

もはやスグルは、我を失いかけていた。

何でこんなに自分が弱いのか？

そしてなんであの悪夢が…あの光景が…!!

「うわああああああああ!!」

もう自分でも訳が分からなくなってきてしまった。

「シエルの役に立てない…俺は弱い…!」

操られるぐらいの弱さなら…いっそ俺なんて…。

スグルの目からは大量の涙が…。

「…うう…ん？」

「あ、起きたわねシエル、あとソードも」

「ああ…ねえ、僕たち…負けたの？」

「負けたらしい」

「…スグルは？」

「いないって…リーフちゃんとチュリちゃんが探しに行ってるわ」

「…え!？」

もしかして責任感じて…。

「スグル…もしかして…」

「シエルはじつとしてなきやだめよ」

「…はあい」

スグルの身には、何があったのか…。

そして、スグルは一体無事なのか？

ごめんねスグル。

僕たちが守ってやれなかったね…

ダークライは、何を目的にスグルの体に乗っ取ろうと…。

「…スグル、大丈夫かな…」

「確かに危なくはあるわね…」

ブルーも不安そうに答えた。

「大丈夫かなあ…」

「…もういやだーっ!!」

そんなスグルの背後に迫る影が…。

「スグルっ、危ないっ!!」

リーフが叫ぶ…。

ダークライの手がスグルの背中へ…。

「スグルーっ!!」

第二十二話 迫りくる影

「…!!」

スグルの背中を突き刺したダークライの手。

スグルの背中からは少し血が流れた。

悪夢が…。

現実…

そして、その様子を見てしまったリーフは、シエルのもとへ。

「シエル、スグルが…ダークライに!!」

「え!？」

スグル…お前…

「行ってくる!!」

「待って、私も行く!!」

「…ああいいけど…」

「いつも助けてもらってばかりじゃだし…だからお願い!!」

「うん、いいよ」

シエルとリーフはスグルのいる場所へ向かう。

そしてスグルは気を失った。

「お前の体はもう俺のものさマッスグマの少年」

ダークライは、先ほど作った傷の中に入っていく。

ダークライはスグルの体を完全に支配してしまった。

スグルの意識はどこへ…

スグルの脳中

「…体が動かない…なんでだろう…」

さっきダークライに受けたはずのところが痛くない。

でも、体が全く動かない。

むしろ、もう体が自分の言うことを聞かなくなっていた。

スグルのその小さな体に秘められた身体能力を、ダークライは悪用しようとしているのであった。

「…また俺は…」

スグルは大きなため息をつく。

もうこれ以上、シエルやリーフに迷惑をかけるわけには…

でも、もうかけちゃってるしな…。

ごめん、シエル…。

こんなに頼りなくて…。

・・・

自分の体力、そして生命力が削られていることに気付くのはまだあ
とのことになる。

スグルの心と体はもうめっちゃめっちゃにされてしまった。

スグルはいつも通りに戻れるのか…

・・・

そして、まず…生き続けることができるだろうか？

シェルたちが着いたころには、もうダークライはスグルの体を支配し、待ち構えていた…。

第二十三話 消えゆく生命（いのち）

スグルの生命力がどんどん削られていく。

スグルが死んだら、ダークライが出て、スグルはもうただの死体と化す。

スグルはまだ生命力が削られていつていることを知らない。

でも、体力がどんどん削られているのはわかった。

「…うぐ…」

ダークライ…。

お前は、俺を殺す気か…。

シエルたちに…迷惑をかけたまま…？

しかし、ダークライが操る自分の口が放った言葉に驚くこととなった。

「こいつの生命力は、次第に削られ、しまいにはただの死体となる」
「…なんだって!？」

シエルの声。

ダークライ、そいつに触れるな…。

それは、俺の大切な…

「ソーラービーム」

やめろ、それはシエルにとって…。

「うわああああ!!」

シエルの悲鳴…。

自分の仲間が散っていく。

それなのに、俺は!!

こんなに簡単に…。

自分の体を…。

スグルの胸は、ずきずきと痛んだ。

もうこれ以上…。

仲間を傷つけるのは…!!

「もう一回ソーラービーム!!」

「やめろーっ!!」

スグルが心の中で叫ぶ。

そしてその時、スグルの身体から光が放たれた。

「スグル…？」

スグルは進化しないはず…。

でも、ダークライの闇とは十分対峙できる輝きが、シエルの前にあった。

シエルの瞳に照り映えるヒカリ。

「…スグル!!!」

「シエル…俺は…大事なものを忘れてた」

「…死んだりしないよね？」

「…わかんない」

スグルが言い放ったその言葉で、シエルの精神は不安定になった。

「…何言ってるの？生きないとダメだよ？」

「…はは…でも、ダークライを倒すなら…」

「やめてよ…」

森の真ん中、光輝く一匹のポケモン…。

そして森のあの闇がどんどん消えていく。

スグルの体に残る生命力はほとんどない…。

闇がほとんど消えたところで、光は失せ、スグルは倒れこんだ。

「スグル…？」

まだ生きている。

でも、もうほとんど――。

でも、まだ大丈夫――！

スグルなら……大丈夫だ――！

そう信じて、森を見まわした。

森には、いつもの平和が戻っていた。

緑の生い茂る、美しいランドパーク……。

それが戻っていたのであった。

シエルの顔は笑顔に満ちた。

ダークライも、先ほどの光を受けて消えた。

今や、暖かな日が舞い降りるいつもの平和なランドパークが……。

戻ってきたのであった。

そしてシエルは、スグルを連れ、家へと向かった。

「大丈夫なの？」

「それが…なんかすっごくぼろぼろで…」

スグルの体は傷だらけで、ぼろぼろだった。

生命力も大きく削られた跡があった。

スグルの命は助かるのか…。

第二十四話 目覚め、記憶、フラッシュバック

「…ん…ぐ…」

スグルは一人、シェルんちで起きた。

あたりを見渡した。

いつもの明るいうランドパークが見える。

暖かな日が舞い降りて、森のポケモンたちが楽しそうにはしゃぎ、遊んでいる。

…俺、何したんだっけ？

そもそも、まったく思い出せない。

この前、自分が何をしたのか、されたのか、行動を起こしたのか…。

記憶に全く残っていない。

…なんでだ？

ものすごく体が重い、痛い、きつい。

でも、なぜか…。

あのダークライの手が自分の背中を貫いたあの瞬間、血がどっと流れだしたあの光景が頭の中でループする。

もしかして俺は…。

あの悪夢が本当になって…

それで…。

…ううん、思い出せねえや。

あの悪夢が何度も。

「う…うわああああ!!」

気が付いたら自分は悲鳴を上げていた。

何でこんなに叫んでるんだ？

俺はいつたい、あの後…。

シエルの家に来た後、何があったんだ…。

自分が弱いと確信した後、どこに向かっていたのだろうか…。

まだ背中が痛む。

そして頭の中では、いい加減にしてくれと言いたくなるほどにあの悪夢がループする。

そして、思い出せない自分への情けなさ。

スグルの頭の中は、いろんな意味でいっぱいだった。

シエルにまた迷惑かけて…。

俺は…いったい何を…？

スグルの頭の中はますます混乱する。

自分の身に起こった出来事。

それぐらい、この傷の深さで分かるはず…。

しかも、あり得ないってほど疲れてるし、なんか生命力がなくなってる感じがする。

何でか思い出さなきゃ…。

…。

…。

…。

あ…。

スグルはやっと思ひ出した。

俺は、自分が弱いと思って、シエルんちを飛び出して、そしてダイクライに背中を貫かれ、血が流れ、そのまま自我を失ったけど、もうこれ以上…！！と思って何とか解放された後、なんか自分の体か

ら光を発した…。

そして倒れこんで…。

そうか…俺は…

もしかして、この森を戻したのか？

悪に満ちていたあの空の状態から…。

いやいや、でも俺がそんなヒーローになるわけないじゃん。

その時、ドアがノックされ、

「スグル？ 入るよ」

シエルの声が聞こえた。

会いたくない。

あんなに迷惑かけちゃった人に。

会いたくないよ…。

スグルはあえて何も言わなかった。

「…あれ？ まだ寝てるのかなあ…」

ごめんねシエル。

俺が迷惑を…。

「早く起きないかなあ…」

…シエル…。

俺、小さいころからずっと迷惑かけてきたのに…。

何でそんなに…。

気にしなくていいのに、俺のことなんて…。

スグルは少々しんどかった。

友達が、こんなに俺のことを思っていることが、うれしかった。

しかし、迷惑をかけてしまったことは、謝らなければいけない。

今回、ダークライの標的となってしまった俺だから…。

だから、シエル、お願いだ。

今は…そっとしておいてくれ…。

スグルにとって、シエルはかけがえのない存在だった。

もし俺が死んでも…。

悲しまないでくれよ!!

スグルは、もう自分が死ぬんじゃないかと思っていた。

はっきり言って、死ぬ確率が高い。

今、こんなにきついなら、死期が近くてもおかしくない…。

今なら、寿命がってもおかしくない。

でも、今はこんな不況だから、医者を呼ぶわけにもいかないし、もちろん手術だってできない。

だから…死んでも…もし死んでも…

スグルの目からあふれる涙。

一人、病室でひくひくいていた。

シエルにはその音が聞こえていた。

泣いている。

あのスグルが…。

いつもは泣かないあのスグルが泣いてる。

なんで泣いているの？

泣かないでよ…。

シエルはスグルの気持ちに気付かず、スグルもシエルの気持ちに気

付かない。

お互いすれ違う気持ち。

この思いはなんなんだろう…。

第二十四話 目覚め、記憶、フラッシュバック（後書き）

あれ？

ポエムっぽくないですか！？

第二十五話　いつも通りに…。

「スグル…起きてるんでしょ？」

ドアの外からシエルの声。

「…うん」

スグルが答えた。

「…なんで泣いてるの？」

「シエル…どうして俺なんかのこと心配するの？」

二匹の質問。

沈黙が続く。

沈黙を破ったのはシエルだった。

「どうして心配するか？ そんなの当たり前でしょ…友達だし…」

「なんで泣いてるか？ それは…大切な人に迷惑をかけちゃったこと…」

「ん？」

「え？」

二人の答えは、互いを思う気持ちだった。

「…ごめんねシエル…!!俺が弱いから…」

スグルの目からの涙はますます多くなる。

「いや…僕も弱い…仲間を守れないなんて、弱すぎて笑っちゃうよ」

シエルも泣き出す。

「「…ごめん…!!」」

二匹で謝った…。

「みんなおはよう!!」

次の日。

今日からいつも通り再開。

「今日はスグルの傷がまだ癒えてないから、今日はスグルは来ないけど…その分、頑張ろうぜ!!」

「オーッ!!」

リーフもマグマもパールもチュリも、思いっきり賛成の意を示した。

今スグルにはミーが付いているので大丈夫。

…だと思ふ。

そしていつも通り、リーフが挑発しツルのムチでとらえ、悪人をとらえていく。

ほとんどリーフが…（汗）

ついにいつも通りの日々へ戻ったのだ。

そして、次につながる…。

というわけで第三章のthird storyは終了です。

第二十五話 いつも通りに…。(後書き)

みじか!!

第二十六話 散らばる仲間（前書き）

f o r t h s t o r y 突入です。

思いつきり新章でまさかの展開です。

第二十六話 散らばる仲間

「おはよう！！！！」

「あ…スグル！！大丈夫なの？」

「おお、まあ…大体治ったから」

「そっか。よかった♪」

あの日から数日…いや、数週間ほど。

スグルの傷は癒え、今日から復帰することになった。

「じゃ、さっそくいくぞ見回り！！」

「うん！」

そしてハッピーズ一行は、森の見回りを開始した。

「ダークライめ…また空間をゆがませやがって…!!」

ここは時空の狭間。

「許さん…!!」

一匹のポケモンが、ダークライの近くへと行こうとした。

「でも…私が言っても…ダークライはきつと…」

「どうしたパルキア」

「ギラティナ…？ 我的悩みを聞いてくれないか？」

「ああいいとも」

「ダークライを…どうやって止めればよいのか？ こいつは数年前にも時空をゆがませておる」

「お前が行くわけにもいかないのか？」

「ここを不在にしたら、空間がゆがんでしまう…だから…」

「そういう時は、ダークライというやつに恨みを持つものを使えばいい」

「ほお…」

「先日、ランドパークという森で、ダークライが時空をゆがませた。森を飲み込んだりした。でも、その時に立ち向かった6匹は敗れた…結局、ダークライに操られたやつが自我を取り戻して自分の体から闇を消す力を使い、すべてを戻した…。つまり彼らはまだ力不足ではあるが、ダークライの力を知っている。だから、そのポケモンたちを使ってダークライを倒せばいい。まあ最も数年後にはなりそうだな…」

「ギラティナ…お前、天才か！」

「いやいや何のなんの…って…（照）まあいい、とにかくそいつらのところに迎え、きつと今頃ランドパークにいるはずだ」

「おお、そうするとも…！」

「じゃあ行ってらっしゃい」

「行ってきます…！！あ、留守番よろしくな…！」

「むう…この辺かな？」

パルキアは現実世界に来了。

しかし、木がたくさん立っているだけで…特にそのポケモンたちは来ない。

きよろきよろしていた。

その時…！

「シエル…あれは…？」

「おお…ええ…！？まさか空間をつかさどるパルキア！？」

パルキアは、本当はこの作戦を使いたくなかった。

実は、ハッピーズをバラバラにしてしまうのだ…。

「…ごめんなあ…」

そして、パルキアは手をチュリにかざす。

「!?!」

そして、チュリは消えた…。

「おい、チュリに何をして…」

マグマが行こうとしたけど、マグマも消えた。

パールも…。

スグルも…。

「…どうなってるんだ!?!」

「シエル…」

リーフがシエルに話しかけようとした瞬間に、リーフも消えた。

「…悪いなあ、ミジュマル君」

そしてシエルも…消えた。

第二十七話 それぞれに欠けるもの…特訓開始!!?

「…いたた…」

チュリが目を覚ましたのは、ランドパークから遠く離れているところ。

「…うう…」

傷が痛む。

「シエルたちはどこに…」

きょろりと周りを見渡しても、どこにもみんなはいない。

「はぐれちゃったのかなあ…」

歩いていたチュリ。

突然黒い影が!!

「!?!」

「驚かせたか? ならばすまん」

「…え!?! え!?!」

「悪かった。」

「あ…え!？」

「おおどうした。そんなにいつまでも驚く必要があるのか？」

「だって…」

「おお、自己紹介がまだだったな。わが名はライコウ。」

「やっぱり…伝説のポケモン…!？」

「そんなに驚かなくてもよいとおろうが。まあ確かにびっくりするかもしれないけど…」

「します!！」

「ああそうじゃな…今からバトルしないか？」

「え!？」

「一対一。どうじゃ、やるか？」

「…やります」

「じゃあこっちへ来い」

そのころ、時空の狭間。

「…うう…」

目を覚ましたスグルは一人、時空の狭間を漂っていた。

「なんだココは…」

さまざまなものが渦巻き、宙に浮き…。

「目が覚めたか」

スグルの前にふいっと現れたのは、時をつかさどる神、ディアルガだった。

「…伝説の…」

「そうだ、俺は伝説のポケモンディアルガ。友人のパールキアに頼まれてるんだ」

「なにを？」

「お前を鍛えろとき。その悪をかき消す能力をモノにできるように。」

「悪をかき消す能力？」

「自覚がないのか…じゃあ仕方ない」

ディアルガは何かを念じた。

すると、周りの景色が変わった。

そして、ダークライに背中を貫かれ、操られるところを見た。

そしてそのあと…。

これ以上仲間を傷つけないというその気持ちを抱き、自分の体内から不思議な光を放った。

「…こんなことが…」

「その光こそが、悪をかき消す能力。まさかこんなに普通のマッス
グマが持っているとは…」

「俺はスグルです。」

「おおそうかスグル。…では、今からバトルをして、お前に欠ける
ものを見つける」

「…望むところです」

一方パールは…。

ここはどこだろう…。

俺は…。

みんなは…。

「起きなさい、リオル君」

「…パールです…」

目を覚ましたのは暗い岩場。

そこにいたのは…。

「私はビリジオン。風のように走る幻のポケモンです」

「…ビリ…!!」

「さて、まあ私はバトルする気はないのですが、パルキアさんの命令ですしね…バトルします」

「え!？」

「さ、こちらへ」

みんなの力を試す…。

大きなバトル。

そして、欠けているものを探す…。

それが新章の始まり。

第二十八話 それぞれに欠けるもの…特訓開始!!?

マグマは…。

「イタタタタ…どうやってここまで来たんだろう僕」

そしてそこに不意に現れたのは…。

「なにをしておるのだポカブ君」

「…エンテイ様…!？」

マグマは驚いた。

何でここに伝説のポケモンが…。

「パルキアに頼まれたんだ。お前を鍛えろと」

「あの僕たちをブツ飛ばしたやつが？」

「アイツは、お前らに助けてほしいんだとさ…。ダークライを倒すと」

「ダークライを…?」

「あいつになら、たぶん例のマッスグマがやってくれるだろうが、それをサポートするのはお前だ。だから、特訓しないといけない。でも、その前に…」

「？」

「お前に欠けているものを探さないといけない。だから、俺とバトルしないといけないのさ…」

「…もちろんやります!!」

リーフは…。

「…うん…」

「あ、起きた？」

「…え!？」

リーフの目の前にいたのはなんとほかでもないセレビィ。

「僕はパルキアに頼まれたから、君を鍛えるの」

「そうなんですか…」

「さ、ほらボーっとしてないでバトルをしなきゃ!! 君に足りないものを探さないと!!」

「うん!!」

シエルは…。

「…うぐ…う…」

目をこすりながら、そつと目を開ける。

「起きたか？」

そこにいたのはパルキア。

「ここは…？」

「水辺のほとりだ。」

「みんなは…」

「今は別々になってる」

「会えるかな…」

「少なくとも一年後には会う」

「…どういことですか？」

「今、みんなにはそれぞれ伝説もしくは幻のポケモンが付いていて、特訓しているのだ。だからお前さんも特訓して強くなって…ダークライを倒してほしい」

「そのために僕らをバラバラに…？」

「そうだ。すまないとは思ってるが…ダークライを倒す、唯一の手段であり、希望なのだ」

「希望…」

「だからまず、お前さんにかけているものを…探さないといけない。そのためにバトルをする…！」

「お願いします、師匠…！」

こうして、みんなのバトルは始まったのだ。

第二十九話 チュリ対ライコウ、スグル対ディアルガ!!

「そっちからどうぞ」

ライコウに指示されたチュリは、足がすくむを感じた。

しかし、相手が伝説のポケモンだからって…なにも、負けるという前提で戦ってはいけない!!

「電光石火!!」

得意の俊足で、ライコウに近づく。

しかしライコウは、そのスピードより勝るスピードでその攻撃を回避する。

「あまいな…雷!!」

「え!？」

不意を突かれたチュリ。

そこに、ライコウの雷が…。

「キャー!!」

チュリは、その攻撃をまともに受けてしまった!!

「…お前に足りないのは…冷静さ、そして…スピード、攻撃力だ。」

「そんなに…!?!」

「冷静に判断してから攻撃を開始しないといけない…。そして、十分スピードはあるが、まだ上げることにも可能だ。そして、一番大事なのは…攻撃の強さ。攻撃が弱いことには…勝つのも不可能だ。だから、今から一年、特訓を開始する」

「…お願いします!!」

シエル、マグマ、スグル、リーフ、パール!!

あたし、強くなるから…!!

「じゃあさっそくバトルを始めようじゃないか…」

「望むところだ!!」

スグルは、ディアルガとの戦いを始めようとしていた。

「…お前から感じるこの意欲はなんだろうな…」

「…」

スグルは動揺せずに、こらえた。

「先攻はそっちな」

スグルはディアルガに指示されたので…。

「炎のパンチ!!」

鋼タイプに相性の良い炎のパンチを繰り出した!!

「ほおほお…やるなあ…だが」

ディアルガはそれをはるかに速いスピードで交わした。

「お前にはまだ…扱えないのか」

「!？」

ディアルガの口から光の玉ができた。

「時のほうこう!!」

そしてそれはスグルに直撃…。

「お前に足りないのは、スピード、防御力…そして動揺しないことだな。動揺したらお前は攻撃の威力が弱まる…だから、お前を今から約一年鍛え上げて、それを克服させてやるからな」

「よろしくお願いします…師匠!!」

シエル：お前にはもう迷惑をかけないからな！

次回、パール対ビリジオン、マグマ対エンテイ！

地味な奴らの戦いが（殴

パール、マグマ

「地味ってなんだー！！」

地味じゃん出番少ないじゃん

マグマ

「…もういいや次回もお楽しみに！」

第三十話 マグマ対エンテイ、パール対ビリジオン!! (前書き)

ポケランも三十話突破ですね。

でもアクセス数はナツの半分にも満たないという…。

第三十話 マグマ対エンテイ、パール対ビリジオン!!

「先攻はお前からだ」

「じゃあお願いします!!…ニトロチャージ!!」

マグマはまっすぐエンテイへ突っ込む。

しかし…。

「あまいな…まだ…スピードが足りてないな」

エンテイはそうつぶやき、寸前のところで交わした。

「…ちえっ」

舌打ちするマグマ。

「お前にはスピードが足りてない…。しかも…炎の威力も弱いのだ。まだまだ伸びる」

「…」

「つまり…お前には特訓を受けてもらおうということだ。心構えはあるか？」

「あります!!」

「…そんじゃ、特訓するか」

「はい!!」

マグマの特訓開始!!

「そちらからどうぞ」

「おおう!!行くぜ、マッハパンチ!!」

「いきなりそんな高威力の技を…考えが甘いですね」

「何!?!」

「聖なる剣!!」

「なにその技…」

そういうパールの方の少し上を、剣が通る。

「…」

パールは恐怖にのまれていた。

「あなたには…そうですね、まだ考える力がないですね。急所にあてるとかそういうものがないですし」

「…はい」

「威力は高いのだから、命中率を高めることと…先ほど私が繰り出した技、聖なる剣を覚えましょう」

「…はい!!」

次回は、リーフ対セレビィ、そして主人公シエル対パルキア！！
そして…！？

シェルとリーフは、
いったいどんなバトルをするのか？

第三十一話 リーフ対セレビィ、シエル対パルキア!! (前書き)

遅くなっちゃいましたあ…。

第三十一話 リーフ対セレビィ、シェル対パルキア!!

「そっちからでどうぞ」

セレビィに言われ、リーフは戦闘態勢になる。

「リーフブレード!!」

尻尾の葉っぱを光らせ、セレビィめがけて突っ走る!!

「攻撃力が高くていい技だね。でも…」

「…何…?」

セレビィはさりと避けた。

「…ツルのムチ!」

ツルを放つリーフ。

しかしそれもさりと避けた。

「根を張る!!」

もしセレビィが攻撃してきたら…。

そのことを考え、冷静に判断した。

しかし、

「君は一つ、大切なことを見落としてない？」

「…」

リーフはもう気づいていた。

自分は、直接ダメージを与える技しか覚えていないのだ。

そして回復わざ。

ダークライはきっと回復ふうじとかの技を出してくるはずだ。

回復わざを一つにすれば…!!

そして、ソーラービームやリーフストームを覚えなないといけない…!!

「もうわかってるよね？君はそこまで頭が悪いわけじゃないんだし」

「私に足りないのは、特殊技や遠距離から放つ技よ」

「よくわかってる…」

セレビィは、このツタージャの心の強さを目の当りにして、この子はきっと強くなれるだろうと確信した。

「君なら大丈夫。ほら、特訓行くよ!!」

にっこりとほほ笑んで、リーフの手を引き、森の中へと走った。

一方シエルは…。

時空の狭間（とはいってもスグルとは遠くかけ離れている）で、パ
ルキアと戦うことに。

「お前からやれ」

「あ…はい!!」

シエルは精神を統一させ、

「シエルブレード!!」

まずパルキアへと突っ込む。

「ちよろいちよろい」

シエルは、この攻撃がかわされることに気付き、上へ飛び、回転しながらパルキアの横を横切った。

「…あれ?どこ行った…?」

きよろきよろするパルキアの背後から、シエルが

「バブル光線!!」

後ろから直撃。

「…頭いいのなお前は」

後ろを見てにたりと笑う。

でも、その直後。

「あくうせつだん」

パルキアは、この一撃にすべてを込めて、シエルに発射した。

しかもあり得ないというすごいスピードで。

とはいってもこれが十分の一のパワーなのである。

そして、シエルに直撃し、シエルはその場に倒れた。

「…いてて…」

「まず、このあくうせつだん…いつもの十分の一ぐらいのパワーのやつにあたって、こんな早く倒れるというのは、体力のなさを示してるな。そこで、せっかく作戦考える力あるんだから、それをもっと生かさないダメだぜ？」

「…うぐっ…」

まさに言い当てている。

「がんばろうじゃないか、シエル君」

「君要りません」

「あ、じゃあシエル、頑張ろうじゃないか!!」

「はい!!」

こうして、みんなの特訓が始まる！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9563t/>

ポケポケ?ランドパーク

2011年9月21日13時03分発行